波音　～忘却～

朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
波音　～忘却～

【Ｎコード】
Ｎ３７５３Ｂ

【作者名】
朔

【あらすじ】
忘れたくない思い出があった。忘れたくない場所があった。けれど暗示をかければかけるほど忘れてゆく。失いたくないと思う程、記憶に霧がかかってゆく。ねぇ、覚えていてくれますか？

忘れたくない思い出があった。
忘れたくない場所があった。
けれど暗示をかければかけるほど忘れてゆく。
失いたくないと思う程、記憶に霧がかかってゆく。

ねぇ、覚えていてくれますか？

『ご主人の病気は治らないものです。この病気は1日ずつ記憶を失ってしまいます。きっと年々酷くなって、最悪奥さんや家族の事も忘れてしまう可能性が出てくるでしょう。認知症と似ていると感じるでしょうが、本人にも記憶を失っている感覚が残るため精神的なダメージを強く受けるケースがあります。出来るだけ多くの思い出を共有して毎日ご主人に話し続けて下さい。』

こんな報告を担当医から受けたのは1年前。
夫は毎日、仕事に行くとか昨日は何をしたのかと私を質問攻めにする。
話に聞いていたのだから理解しているつもりだったが、意外と私まで辛い。
「なぁ、昨日は何をしたんだっけ？」
また夫はベランダから外を見ながら聞いてくる。
「昨日も外を見ていましたよ。」
「そうか。なぁスケッチセットはどこにあるかな。久しぶりに絵を描こうと思うんだ。」
昨日と同じ会話。
毎日変わらない行動。

「机の上に出してあるから使ってちょうだい。」
これが毎朝の会話。
1日の始まり。
夫は絵を描き始めたら無口になる。
もともと口数が多いほうではないけれども。
いつも夢中になって絵を描いている。
「この絵はいつ描いたものだろう？」
机の上にあったスケッチブックをぱらぱらとめくって不思議に思っている夫がいる。
なぜなら夫は結婚してから今まで絵を描くのをやめていた。
付き合っている当時は、夫は芸術大学の学生で油絵を描いていた。
しかし、将来性が見えなかったために趣味として絵を描く事と断念して最終的には封印してしまった。
それからは文句言わずに家族のために働いてくれた。
自慢の夫である。
だからこそ、胸が苦しくなるときがある。
「昨日描いたでしょ？」
「そんなわけない。学生以来描いていないのだから。ここはどこの絵だろう？こんな場所は知らないな。」
「その場所はあなたがプロポーズしてくれた場所よ。」
「プロポーズ…？」
夫は当時の記憶から失ってしまった。
夫婦としての第一歩の思い出が失われた。
初めはショックを受けたけれど、こう毎日聞けば耳にたこ。ショックなど受けなくなる。
夫の質問攻めが中断したので、私は一気に家事に取り掛かった。

次の日曜日。
家にいるから何も変わらないのかと思い、近くの海へ散歩に出た。
私は２０年以上ぶりになるデート気分を満喫しようと心に決めた。

いつものように質問攻めが始まっても、
きっと明日には今日の事など忘れてしまうだろう夫に、今日はとことん付き合おうと。

「さすがにまだ海にくるには早いわね。思ったよりも寒かったわ。」
私は夫の数歩後ろを歩いて呟いた。
この海は覚えてる？
ここで初デート。この先の公園でプロポーズしてくれたのよ。
あえて言葉にはしないで心で聞いてみる。
案の定、夫はひたすら歩き続ける。
喉まで出かかった溜め息を押し殺して夫の腕に自分の腕を絡めた。
夫は横目で見てまた視線を戻した。その表情は無表情みたい。
でもこんな夫は照れているのだと私には確信があった。
しばらく2人は会話もせず浜辺をゆっくりと歩いていた。
ふと夫は立ち止まって私を見た。
「ここ知ってる。」
「そうね、近いからすぐに来れるものね。」
「違う。お前と一緒に来たんだ。」
「こんなふうに2人で来たんだ。お前ははしゃいで足を濡らしていただろう？」
思い出し笑いをしながらぽつり、ぽつりを話し出す。
「この先をもう少し行くと公園がある。そこでお前にプロポーズしたんだ。」
私の視界は滲んでしまって夫がどんな顔して話しているのか見えない。
けれど話し方がこんなに穏やかなのはいつ以来だろう。
毎日、夫は静かに自分自身に腹を立てていた。
自分の思いとは別に記憶を失う事に。
それを私にぶつけないように我慢してくれていたと知っている。
知っていたんだ。

「俺がこんな病気でお前に迷惑かけてすまない。今日まで一緒にいてくれた事に感謝する。ありがとう。でも、好きなように生きていいんだ。気を使わないでいいんだ。誰も責めたりしないさ。」
まるで病気なんて嘘のように生気のある目が私を見ていた。
優しい自慢の夫。
それは病気だからって変わらない。
こんな奇跡が１０年に一度だとしても、今日限りだとしても
私は夫を選んだ事に、夫と生きている事に後悔はしない。
どんな夫でも愛しいと思う自分がいる。

「愛してる。ずっと一緒に生きましょう、あなた。」

そう告げた私を見て夫に驚きと感謝の気持ちが同時に見て取れた。
照れたように、嬉しそうに笑う夫。
あぁ幸せだなぁ、と実感する。
こんな夫を見たいから一緒にいたい。
辛い時も楽しい時も一緒にいたいから結婚して“夫婦”になった。

ずっと同じ夢を見ようね。

帰宅すると夫はまたいつもの夫に戻った。
さっきの事などもう忘れてしまっている。
それでもいい。
それでも幸せ。
だって私が夫の分も覚えているから。
――――――毎日聞かせてあげるの。
私たちの恋愛を――――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3753b/

波音　～忘却～

2011年1月27日06時39分発行